慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オットー・バウアーとユダヤ人問題
Sub Title	Otto Bauer und die Judenfrage
Author	勝又, 章夫(Katsumata, Akio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2013
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.106, No.3 (2013. 10) ,p.379(57)- 400(78)
JaLC DOI	10.14991/001.20131001-0057
Abstract	オットー・バウアーはオーストリアにおける民族対立を解決するために民族自治の導入を主張したが, 彼はガリツィアのユダヤ人には民族自治を認めようとしなかった。一見するとユダヤ人差別とも思えるバウアーの態度の背後にはユダヤ人問題それ自体が抱える矛盾が存在した。本稿は, バウアーの見解をナータン・ビルンバウムのそれと比較することによって, 民族問題としてのユダヤ人問題に内在する矛盾を明らかにする試みである。 Although Otto Bauer argued for the introduction of national autonomy for solving national conflicts in Austria, he did not accept national autonomy for the Jewish people in Galicia. Bauer's attitude, which can be considered at a first glance as prejudice toward the Jewish, had in its background the contradiction inherent to the Jewish question itself. This study elucidates the contradictions inherent to the Jewish question, highlighting the national question by comparing Bauer's view with Nathan Birnbaum's view.
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20131001-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オットー・バウアーとユダヤ人問題
Otto Bauer und die Judenfrage

勝又　章夫(Akio Katsumata)

オットー・バウアーはオーストリアにおける民族対立を解決するために民族自治の導入を主張したが，彼はガリツィアのユダヤ人には民族自治を認めようとしなかった。一見するとユダヤ人差別とも思えるバウアーの態度の背後にはユダヤ人問題それ自体が抱える矛盾が存在した。本稿は，バウアーの見解をナータン・ビルンバウムのそれと比較することによって，民族問題としてのユダヤ人問題に内在する矛盾を明らかにする試みである。

Abstract

Although Otto Bauer argued for the introduction of national autonomy for solving national conflicts in Austria, he did not accept national autonomy for the Jewish people in Galicia. Bauer's attitude, which can be considered at a first glance as prejudice toward the Jewish, had in its background the contradiction inherent to the Jewish question itself. This study elucidates the contradictions inherent to the Jewish question, highlighting the national question by comparing Bauer's view with Nathan Birnbaum's view.

「三田学会雑誌」106 巻 3 号（2013 年 10 月）

オットー・バウアーとユダヤ人問題

勝　又　章　夫

（初稿受付 2013 年 8 月 22 日，
査読を経て掲載決定 2013 年 11 月 5 日）

要　　旨

オットー・バウアーはオーストリアにおける民族対立を解決するために民族自治の導入を主張したが，彼はガリツィアのユダヤ人には民族自治を認めようとしなかった。一見するとユダヤ人差別とも思えるバウアーの態度の背後にはユダヤ人問題それ自体が抱える矛盾が存在した。本稿は，バウアーの見解をナータン・ビルンバウムのそれと比較することによって，民族問題としてのユダヤ人問題に内在する矛盾を明らかにする試みである。

キーワード

オットー・バウアー，ユダヤ人問題，ナータン・ビルンバウム，ガリツィア，イディッシュ語

はじめに

オーストロ・マルクス主義の論客オットー・バウアーのユダヤ人問題に対する対応は，一見すると彼の民族自治論と矛盾しているように思える。1907 年に発表された主著『民族問題と社会民主主義』においてバウアーは，諸民族がその居住地域において自治権を行使する領土原理ではなく，その居住地にかかわりなく諸個人に民族的権利が認められる個人原理に基づく民族自治を主張していた。しかしバウアーは，特定の領土を持たず，それ故，個人原理にしか民族自治を期待できないユダヤ人には民族自治を認めようとしない。バウアーによれば，ユダヤ人は周囲の民族に同化されざるを得ず，従って，民族自治を認める必要はないというのである。(1)

ユダヤ人に対するバウアーの対応は，同じくオーストリアの民族問題の一つ，チェコ少数派の問題に対する対応と明らかに異なっている。バウアーは，ドイツ人地域におけるチェコ少数派に対しては「同化を強制しないが妨げない」(2)という立場で応じたのに対して，なぜユダヤ人には同化以外に選択肢は存在しないというのか。また，バウアーはチェコ少数派学校においては「母語による教

---

(1)　Otto Bauer, Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, in: ders., *Werkausgabe*, hrsg. von der Arbeitsgemeinschaft für die Geschichte der österreichischen Arbeiterbewegung, Bd.1, Wien 1975, S.414ff.

育」を原則としたのに対して，なぜイディッシュ語で教育する学校には嫌悪を隠さなかったのか。ニーラ・ユヴァル＝ディヴィスが指摘するように，バウアーの民族自治構想には「一貫性が欠けている」[(3)]ことは明らかであり，『民族問題と社会民主主義』におけるユダヤ人問題の章は同書のなかで「異質」であるというエンツォ・トラヴェルソの主張も説得的であるように見える[(4)]。

しかし思想は時代の鏡にほかならない。一見して理論的な矛盾と見える主張も，同時代の歴史的背景の下では不可避的な結論として現れるかもしれない。ユダヤ人問題に関するバウアーの発言は，ガリツィア・ユダヤ社会民主党の成立という特殊な背景の下でなされている。それ故，バウアーの発言を理解するためには，バウアーの思想についてだけでなく，ガリツィアにおけるユダヤ人労働運動の発展，さらにユダヤ人問題に対するオーストリア社会民主党の対応についての理解が不可欠であろう。

また理論上の矛盾が実際にはしばしば対象そのものの矛盾の反映であるとすれば，ユダヤ人問題に対するバウアーの対応を引き起こしたのはユダヤ人問題そのものが抱えていた矛盾ではなかっただろうか。この点を明らかにするためには，ユダヤ人問題と格闘した他の思想家と比較することが必要であると思われる。そのような思想家の一人として，東欧ユダヤ人の言語，イディッシュ語の権利のために尽力し，1908 年のチェルノヴィッツ言語会議の主催者として知られるナータン・ビルンバウムが挙げられよう。ビルンバウムはバウアーと同様に，ハプスブルク帝国末期を生き，ドイツ社会に同化されたユダヤ人だが，ユダヤ人に対する対応はバウアーと対照的であった。ビルンバウムはシオニズムの先駆者だっただけではない。テオドール・ヘルツルらの政治的シオニズムと決別してからは，オーストリアにおけるユダヤ人の民族自治を要求したのである。対照的な結論に到達したとはいえ，バウアーとビルンバウムが同じ問題に直面していたとすれば，それはビルンバウムにおいても理論的な矛盾として現れていたはずである。そうだとすれば，そこからユダヤ人問題そのものの矛盾が明らかになるのではないだろうか。

1. ガリツィアにおけるユダヤ人労働運動

1900 年にオーストリアにはおよそ 122 万人のユダヤ人が存在した。首都ウィーンには約 14 万 7,000 人のユダヤ人が生活していたが，オーストリアで最も多くのユダヤ人が集中した地域はガリ

---

(2) Bauer, Nationale Minderheitsschulen, *Werkausgabe*, Bd.8, S.271ff. チェコ少数派学校に対するバウアーの対応に関しては，拙稿「オットー・バウアーと民族自治——チェコ少数派学校をめぐって——」三田史学会編『史学』第 77 巻第 1 号 2008 年を参照されたい。

(3) Nira Yuval-Davis, Marxism and Jewish Nationalism, in: *History Workshop. A Journal of Socialist and Feminist Historians*, Nr.24, Oxford 1987, p.95.

(4) Enzo Traverso, *The Marxists and the Jewish Question. The History of a Debate 1843–1943*, New Jersey 1994, p.79.

ツィアであり，1900 年にガリツィアのユダヤ人人口は 81 万人を超えていた。これはガリツィアの総人口の 11 %にあたり，オーストリアのユダヤ人の 66 %がガリツィアに住んでいたことになる。(5)

ガリツィアのユダヤ人はウィーンのユダヤ人と文化的に大きく異なっていた。ウィーンのユダヤ人がドイツ人社会に同化された「西欧ユダヤ人［Westjuden］」だったのに対して，ガリツィアのユダヤ人は伝統的な文化を維持した「東欧ユダヤ人［Ostjuden］」であった。東欧ユダヤ人とはビルンバウムによって広められた概念であるが，それは単なる地理的概念ではない。東欧ユダヤ人とはむしろハシディズム信仰ととりわけイディッシュ語によって特徴づけられる独自の文化共同体であった。(6) イディッシュ語とは中世高地ドイツ語から発展し，ヘブライ語やスラヴ系諸語の語彙を加えた言語である。しかしイディッシュ語はオーストリアにおいて「地域的な性格の方言」と看做されていたため，「国家基本法」第 19 条で保障された「州の習慣的言語すべての平等」はイディッシュ語に適用されず，(7) 公立学校でイディッシュ語を教育言語とすることは認められていなかった。

イディッシュ語は法的に承認されていなかっただけではない。それはドイツ語によく似ていたがために，ドイツ人から別個の言語としては認められず，単なる卑語，ジャルゴンと看做され，事実，20 世紀の初めまで「ジャルゴン」と呼ばれていた。注目すべきことは，社会主義者もイディッシュ語に対して侮蔑的な態度をとっていたということである。フリードリヒ・エンゲルスやカール・カウツキーはイディッシュ語を「堕落したドイツ語」と呼び，(8) バウアーもユダヤ人は文化的な支配階級を持たなかったために，彼らの言語は「萎縮」したのだと主張している。(9) ユダヤ人解放への第一歩としてユダヤ人の文化的特殊性の放棄を求めたユダヤ啓蒙主義も，イディッシュ語に対して同様の態度をとった。(10) 1880 年代以降，ガリツィアにおいてユダヤ啓蒙主義はドイツ文化に代わってポーランド文化への同化を要求するようになったが，(11) その代表的論客は，労働運動にも強い影響力を持っていた文芸批評家のヴィルヘルム・フェルトマンである。彼はポーランド・ナショナリズムを信奉する一方で，イディッシュ語を社会進歩に対立するものとして厳しく批判した。(12) 彼は「文明の領域にジャルゴンのための場所はない」とさえ述べたという。(13)

とはいえ，ユダヤ啓蒙主義によってどれほど批判されたとしても，イディッシュ語は東欧ユダヤ人の母語であった。その意味を教えてくれる小咄がある。「イスラエルに移民したユダヤ女が下手

---

(5) Jakob Thon, *Die Juden in Oesterreich*, Berlin 1908, S.8.

(6) Heiko Haumann, *Geschichte der Ostjuden*, München 1999, S.58.

(7) Gerald Stourzh, *Die Gleichberechtigung der Nationalitäten in der Verfassung und Verwaltung Österreichs 1848–1918*, Wien 1985, S.74ff.

(8) Friedrich Engels, Revolution und Konterrevolution in Deutschland, in: Karl Marx, Friedrich Engels, *Werke*, hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED［以下 *MEW* と略称］, Bd.8, Berlin 1960, S.50; Karl Kautsky, Nationalität und Internationalität, in: *Ergänzungshefte zur Neuen Zeit*, Nr.1, Stuttgart 1907/08, S.7.

(9) Bauer, Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, *a.a.O.*, S.421.

(10) Haumann, *Geschichte der Ostjuden, a.a.O.*, S.111ff.

なヘブライ語を話しながら市場で林檎を売っていた。それを見ていたガリツィア・ユダヤ人の男が言った。『イディッシュ語で話せばいいではないか。』女は答えて言った。『でも私たちはディアスポラの身ではありませんか』と。[14]」この小咄はイスラエルにおいてさえイディッシュ語の世界が東欧ユダヤ人の真の故郷なのだということを伝えている。しかしこのようなイディッシュ語からイディッシュ文学が成立する契機となったのは，奇妙なことに，ユダヤ啓蒙主義それ自身であった。イディッシュ語の放棄を東欧ユダヤ人に要求するためには，まさにイディッシュ語で語りかける必要があったからである。こうしてロシアでは 19 世紀半ば以降イディッシュ文学が成立したが，それは言わば「イディッシュ語に対する憎しみ」から生まれた文学であった。[15] ロシアよりもイディッシュ文化の発展が遅れていたガリツィアでは，ユダヤ・ナショナリズムや社会主義運動のような政治運動がイディッシュ語の発展を牽引することになる。[16] このような運動の先頭に立っていたのがビルンバウムであった。

ウィーンのユダヤ人とガリツィアのユダヤ人は社会的にも対照的であった。ウィーンのユダヤ人が文化的特殊性を放棄することによって社会進出を果たしたのに対して，ガリツィアのユダヤ人は小商人，労働者として絶望的な貧困に喘いでいた。移民という道を選択した者も少なくない。1881 年から 1910 年までの 30 年間に 23 万 6,000 人のユダヤ人がガリツィアを離れている。[17] ガリツィア・ユダヤ人の貧困を招いたのは社会構造の変化であった。1900 年の統計によると，ユダヤ人就業者の 25 %は商業に携わっていた。これをキリスト教徒との比率で見ると，ガリツィアにおける商人の実

---

(11) イディッシュ語が日常言語として認められていなかったとはいえ，住民調査の結果からユダヤ人のポーランド化傾向を読み取ることができる。1900 年の調査によるとドイツ語を日常言語とするユダヤ人が 17.1 %，ポーランド語が 76.6 %だったのに対して，1910 年の調査ではドイツ語が 2.9 %へと激減し，ポーランド語が 92.7 %を占めるに至った。この間，ウクライナ語も 5 %から 2.5 %へと半減している。Theodor Haas, Die sprachlichen Verhältnisse der Juden in Österreich, in: *Zeitschrift für Demographie und Statistik der Juden* [以下 *ZDSJ*], 11.Jg., Nr.1, Berlin 1915, S.3. このようなユダヤ人のポーランド化傾向は，野村真理が指摘しているように，ユダヤ人とウクライナ人の関係を悪化させた。野村真理『ガリツィアのユダヤ人——ポーランド人とウクライナ人のはざまで——』人文書院 2008 年。

(12) Ezra Mendelsohn, Jewish Assimilation in Lvov: The Case of Wilhelm Feldman, in: *Slavic Review*, vol.28, No.4, Dec. 1969.

(13) Iakov Bros, Der anheyb fun der yidisher arbeter-bavegung in galitsie, in: Elias Tsherikover u.a. (Hg.), *Di yidishe sotsialistishe bavegung biz der grindung fun „bund“. Forshungen, zikhroynes, materialn*, Vilne / Paris 1939, S.495.

(14) Salcia Landmann, *Jiddisch. Abenteuer einer Sprache*, München 1964, S.153.

(15) *Ebd.*, S.39.

(16) Gabriele Kohlbauer-Fritz, Yiddish as an Expression of Jewish Cultural Identity in Galicia and Vienna, in: *Polin. Studies in Polish Jewry*, Vol. 12, London / Portland 1999, p.169.

(17) Piotr Wróbel, The Jews of Galicia under Austrian-Polish Rule, 1869–1918, in: *Austrian History Yearbook* [以下 *AHY*], Vol.XXV, Minnesota 1994, p.108.

に 87 %がユダヤ人だったことになる[18]。彼らの多くは農民と市場の仲介という役割を担っていたが，この役割を奪ったのが「農業サークル［Kółka rolnicze］」と呼ばれるキリスト教徒の農業協同組合である。農業サークルは 1900 年までに 3,000 以上も設立され，農民に代わって生活必需品を購入し，農業生産物を市場で販売するようになった[19]。こうして，マルクスの言葉を借りるならば，「キリスト教徒がユダヤ人になる[20]」ことによって，ユダヤ人はその社会的役割を失ったのである。

ガリツィア・ユダヤ人の 26.4 %は工業に携わっていた。彼らは食料品・飲料生産，衣料品生産に従事する職人や労働者であったが，彼らはしばしば一日 17 時間にも及ぶ長時間労働と低賃金，劣悪な労働条件に苦しみ，しだいに社会民主党に接近していった。それは，当時ポーランドのユダヤ人労働者の実態を調査したザウル・ラファエル・ランダウによれば，「際限のない惨めさのなかで，彼らは手が差し延べられるなら何にでもすがる」からであった。ランダウは社会民主主義者がユダヤ人労働者の間で「唯一の人民の友」として迎えられていることも驚くに値しないという[21]。その典型例が祈禱用のマントを製造するコロミヤの労働者であった。1892 年，彼らは三ヶ月に及ぶストライキに敗北した後，「非人間的な搾取」に抗議し，「国際主義的社会民主主義」への忠誠を宣言している[22]。

これらのユダヤ人労働者ははじめガリツィア社会民主党の傘下にあり，オーストリア社会民主党がウィーン党大会を経て民族別組織の連合体へと転換してからは，ポーランド社会民主党によって組織されていた。しかしユダヤ人労働運動の自立化傾向は 1890 年代のはじめから見られ，1892 年には「ユダヤ労働者党」が結成されている。それは，同党の機関誌『労働者の声』が主張しているように，ポーランド人を中心とする党によってガリツィアの労働者をすべて組織することは困難であり，多くの労働者を啓蒙するためには，民族別の組織が必要であると考えられたからであった[23]。ユダヤ労働者党は一年で活動を停止したが，20 世紀初頭にユダヤ人の自治的な組織という要求が強まった背景には，「ポーランド＝リトアニア＝ロシア・ユダヤ労働者総同盟」（ブンド）の影響と並んで，ポーランド社会民主党がユダヤ啓蒙主義から継承した同化主義的傾向に対する反発があった。

もちろんポーランド社会民主党はユダヤ人労働者の下における宣伝を無視していたわけではない。

（18） Vgl. Thon, *Die Juden in Oesterreich*, *a.a.O.*, S.122ff.

（19） Siegfried Fleischer, Enquête über die Lage der jüdischen Bevölkerung Galiziens, in: *Jüdische Statistik*, hrsg. vom Verein für Jüdische Statistik, Berlin 1903, S.219. 農業協同組合を支援していた農民党 Stronnictwo Ludowe は，農民の経済状況の改善と同時に，農村経済からのユダヤ人の排除も目標としていた。Kai Struve, Die Juden in der Sicht der polnischen Bauernparteien vom Ende des 19. Jahrhunderts bis 1939, in: *Zeitschrift für Ostmitteleuropa-Forschung*, 48.Jg., Marburg 1999, S.193/194.

（20） Marx, Zur Judenfrage, *MEW*, Bd.1, S.373.

（21） S. R. [Saul Raphael] Landau, *Unter jüdischen Proletariern. Reiseschilderungen aus Ostgalizien und Russland*, Wien 1898, S.13.

（22） Bros, Der anheyb fun der yidisher arbeter-bavegung in galitsie, *a.a.O.*, S.498/499.

（23） *Ebd.*, S.491.

1893 年にはすでにイディッシュ語の新聞『労働者』が刊行されている。[24] しかし，コロミヤの職工ストライキを組織したユダヤ人社会主義者マックス・ツェッテルバウムでさえ，イディッシュ語の価値を認めようとせず，「ユダヤ人社会民主主義者の唯一の課題は西欧文化と社会主義的世界観をユダヤ人プロレタリアートの下で普及すること」であると主張した。[25] ポーランド社会民主党は 1903 年，ユダヤ人活動家の要求に応じて，「ユダヤ煽動委員会」を設置したが，その代表となったヘルマン・ディアマントも同化主義者であり，ポーランド社会民主党はブンドの文献の使用さえ禁止した。[26]

これに対して，シオニスト系の労働運動は，1904 年 5 月，クラクフにおいて「ユダヤ労働者・商業従業員連盟」を結成し，イディッシュ語による機関誌『ユダヤ労働者』の発行を計画していた。[27] このようなシオニストの活動に直面して，ユダヤ人労働者の間で煽動を行っていたヘンリク・グロスマンは，ユダヤ人の自治的な社会主義組織の建設が急務であると主張したという。[28] 1904 年 10 月，ポーランド社会民主党クラクフ党大会において，ユダヤ人の「別個の組織」は「全プロレタリアートにとって有害」であると決議されると，[29] 翌年 5 月 1 日，それに対抗してガリツィア・ユダヤ社会民主党の結成が宣言されることになる。

ユダヤ社会民主党は労働者の組織化を進め，1905 年 10 月までに 2,500 人の労働者を労働組合に組織した。ガリツィアで 1904 年までに組織された労働者が 5,700 人にすぎなかったのであるから，これは少なくない成果と言えよう。[30] ユダヤ社会民主党は，その指導部に同化ユダヤ人の知識人も参加していたとはいえ，多くのユダヤ人労働者を組織することによって，ポーランド社会民主党ともシオニズムとも異なる民族観を獲得することができた。その民族観は党指導者となったグロスマンの論文「ガリツィア・ユダヤ社会民主党」から読み取ることができる。グロスマンは一方で，イディッシュ語を言語と認めようとしないポーランド人の同化主義者を厳しく批判し，それを通してマルクスの著作やエルフルト綱領を読むことができるこのイディッシュ語が言語ではないというのかと反論している。[31] 他方でグロスマンは，ユダヤ社会民主党の結成がユダヤ人労働者の下における煽動という実践的な動機に基づいていることを強調し，ユダヤ人が同化された少数派にすぎない地域では

---

(24) *Ebd.*, S.497.

(25) Max Zetterbaum, Probleme der jüdisch-proletarischen Bewegung, in: *Die Neue Zeit*, 19.Jg., Stuttgart 1900/01, Bd.1, S.867ff. コロミヤにおけるツェッテルバウムの活動に関しては，Der jüdische Weberstreik in Kolomea, in: *Arbeiter-Zeitung*, 4.Jg., Nr.32 vom 5. August, Wien 1892. を参照。

(26) Yoysef Kisman, Di yidishe sotsial-demokratishe bavegung in galitsie un bukovine, in: G. Aronson u.a. (Hg.), *Di geshihkte fun bund*, Bd.3, New York 1966, S.364.

(27) Parteitag der jüdischen Arbeiter und Handelsangestellten Oesterreichs, in: *Die Welt*, 8.Jg., Nr.23, Wien 1904; Zum Krakauer Parteitag der jüdischen Arbeiter und Handelsangestellten Oesterreichs, in: *Die Welt*, 8.Jg., Nr.24, Wien 1904.

(28) Rick Kuhn, *Henryk Grossman and the Recovery of Marxism*, Urbana / Chicago 2007, p.21.

(29) Kisman, Di yidishe sotsial-demokratishe bavegung in galitsie un bukovine, *a.a.O.*, S.366.

(30) *Ebd.*, S.385.

ユダヤ人組織を求めないという。[32] ここで注目すべき点は，グロスマンがこれらのユダヤ人は「脱民族化」されていると述べていることである。「我々にとってユダヤ民族とは，形而上学的な仕方で思弁的に作られたものではなく，経験と生活によって我々に強いられた現実である」とグロスマンは主張しているが，[33] このとき彼はシオニストとは異なり，すべてのユダヤ人を単一の民族と看做すのではなく，ユダヤ民族をイディッシュ語によって根拠づけていたと言えよう。このような民族理解に基づき，ユダヤ社会民主党は 1906 年の第 2 回党大会においてユダヤ人の「民族的＝文化的自治」を要求することになる。[34]

ユダヤ社会民主党が結成されるとただちに，ポーランド社会民主党はユダヤ人の「分離主義」を非難した。ブリュン綱領によれば，オーストリアは将来，民族自治に基づく連邦国家へと再編されることになっているが，社会民主党の個々の民族的組織は「これらの民族領域の範囲内で」労働者の利害を代表すべきなのであるから，ガリツィアのユダヤ人労働者の利害はポーランド社会民主党によって代表されなくてはならないというのである。[35] とはいえ，このような主張は説得力に欠けるものであった。ポーランド社会党と同盟関係にあったポーランド社会民主党が民族的組織であることは明らかであり，[36] しかも，ブコヴィナのユダヤ人社会民主主義者ダーヴィト・バラカンが指摘しているように，ガリツィア・ユダヤ人の圧倒的多数は東ガリツィアのウクライナ人の下で生活していたからである。[37] さらにポーランド社会民主党は，「アメリカ，イギリス，オランダ，オーストリアのような立憲国家」においてユダヤ人が別個の組織を形成した例はないと主張したが，[38] この主張もカウツキーの発言によって説得力を失っていた。カウツキーはロンドンで組織されたユダヤ人労働運動の機関誌に書簡を送り，そこでユダヤ人労働運動にはイギリスで果たすべき特殊な役割があると述べていたのである。[39]

---

(31) Jindřich [Henryk] Grossman, Židovská strana sociálně demokratická v Haliči, in: *Socialistická Revue. Akademie*, roč.10, Praha 1906, str.17.

(32) *Tamtéž*, str.14.

(33) *Tamtež.*

(34) Kisman, Di yidishe sotsial-demokratishe bavegung in galitsie un bukovine, *a.a.O.*, S.388.

(35) *Protokoll über die Verhandlungen des Gesamtparteitages der Sozialdemokratischen Arbeiterpartei in Oesterreich*, Wien 1905［以下 *Parteitag 1905*］, S.52.

(36) ローザ・ルクセンブルクはユダヤ人の民族的組織を認める立場にはないが，ユダヤ社会民主党の分離はポーランド社会民主党における社会愛国主義の帰結であると指摘している。Rosa Luxemburg, Vorwort zu dem Sammelband „Die Polnische Frage und die sozialistische Bewegung“, in: dies., *Internationalismus und Klassenkampf*, hrsg. von Jürgen Hentze, Neuwied / Berlin 1971, S.210.

(37) David Balakan, *Die Sozialdemokratie und das jüdische Proletariat*, Czernowitz 1905, S.58.

(38) *Parteitag 1905*, S.52.

(39) Karl Kautsky über Judentum und jüdisches Proletariat, in: *Die Welt*, 9.Jg., Nr.50, Wien 1905.

オーストリア社会民主党はポーランド社会民主党の意向を受け，ユダヤ社会民主党を「事実上，党の外部」[40]にあるものと看做したが，この背景にあったのは社会民主党内部の民族対立であったと思われる。当時，社会民主党においてはチェコ労働組合自治派をめぐってチェコ人とドイツ人が激しく対立しており，ユダヤ社会民主党を承認すれば，チェコ人に恰好の前例を与えることになりかねなかった。これに対して，ポーランド社会民主党は貴重な仲介役であった。ヴィクトル・アードラーは，「厄介なチェコ人とも折り合っていける」のはポーランド社会民主党の指導者イグナツィ・ダシンスキのお陰であると述べている[41]。このような状況においては，ユダヤ社会民主党を承認することは不可能であったろう。しかしユダヤ社会民主党の自立を否定するためには，より説得力ある論拠が必要であった。まさにそれを提供することがバウアーの課題だったのである。

2. バウアーとユダヤ人の民族自治

バウアーもポーランド社会民主党と同様に，ブリュン綱領から社会民主党の組織のあり方を導きだしている。将来のオーストリアにおける民族自治領域において労働者の利害を代表するのが，社会民主党の民族別組織だというのである。それ故，彼はユダヤ社会民主党の存在意義を否定するためにユダヤ人の民族自治を否定しようとする。しかし民族を「運命共同体から生じた性格共同体」と定義し，それを言語や領土から切り離したバウアーにとって，ユダヤ人が共通の言語を持たないという理由でユダヤ人に民族性を否定することはできなかった。事実，バウアーは『民族問題と社会民主主義』の冒頭で，「ユダヤ人は共通の言語を持たないが，それでもやはり民族である」と述べている[42]。そこでバウアーはユダヤ人に民族自治を認められない根拠としてユダヤ人の同化を挙げるのである。

バウアーによれば，ユダヤ人が封建時代に異邦人として登場したとき，ヨーロッパの農民は自らの需要を満たすために生産する自然経済を営んでおり，ユダヤ人はこの自然経済社会において貨幣経済の担い手であった。バウアーは，この時代のユダヤ人が自然経済文化と貨幣経済文化の相違によって疑いなく一つの民族をなしていたという[43]。しかし貨幣経済がヨーロッパの諸民族の経済体制として確立されると，ユダヤ人はもはや貨幣経済の独占的な担い手ではあり得なくなる。その結果，

---

(40) *Parteitag 1905*, S.52.

(41) Adler an Bebel, 30. November, 1899, in: Victor Adler, *Briefwechsel mit August Bebel und Karl Kautsky sowie Briefe von und an Ignaz Auer, Eduard Bernstein, Adolf Braun, Heinrich Dietz, Friedrich Ebert, Wilhelm Liebknecht, Hermann Müller und Paul Singer*, gesammelt und erläutert von Friedrich Adler, hrsg. von Parteivorstand der Sozialistischen Partei Österreichs, Wien 1954, S.334.

(42) Bauer, Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, *a.a.O.*, S.69.

(43) *Ebd.*, S.415/416.

「ユダヤ人は国中に分散し，あらゆる生産部門に配分[44]」され，周囲の民族に同化し始めるというのである。もちろん，この同化過程はまだ終了していない。それ故，西欧，中欧のユダヤ人がもはや民族ではないとは言えないものの，「民族であることを止めつつある」とバウアーは主張する[45]。

バウアーによれば，西欧，中欧のユダヤ人とは異なり，東欧ユダヤ人はユダヤ人の言語と習慣を維持しているが，彼らが小ブルジョアと労働者によってのみ構成されていたため，東欧ユダヤ人は「歴史なき民族」という性格を帯びている。しかし同じく「歴史なき民族」と特徴づけられたチェコ人が「歴史的民族」へと覚醒したのに対して，東欧ユダヤ人は周囲の民族に同化されるという。というのも，バウアーによれば，キリスト教徒とユダヤ人がもはや別の経済体制を体現しなくなってからは，居住地の共同体は密接な交流共同体を形成しており，固有の領土を持たないユダヤ人が特殊な文化を維持することは不可能だからである[46]。もちろん，バウアーも東欧ユダヤ人の文化的覚醒を知らないわけではない。しかしバウアーにとっては，東欧ユダヤ人の文化的復活は移行期においてのみ可能なのであって，歴史的に見れば，最終的な同化は不可避であった[47]。

このようにバウアーはユダヤ人に没落を宣告することによってユダヤ人の民族自治を否定しただけではない。民族自治の中核をなすユダヤ人学校もユダヤ人労働者の利害に反するという。バウアーによれば，ユダヤ人に対する素朴な反感が他の民族の労働者の間に存在するので，ユダヤ人労働者が様々な生産部門で職を得るためには，まず周囲の民族に文化的に順応する必要があるというのである[48]。

ユダヤ人の同化を要求するバウアーがユダヤ啓蒙主義の伝統を踏襲していることは明らかであろう。同時に，バウアーの態度の根底には，労働者の解放を媒介とした普遍的な人間的解放を求めるマルクス主義の要求と民族的解放という政治的課題との矛盾があると思われる[49]。バウアーにおいてこの矛盾は，一方で民族性を「個人の固有性の一部[50]」と把握することによって個人原理に基づく民族自治を基礎づけながら，他方で，民族的少数派は資本主義的発展の受け皿となり得ないのだから，没落せざるを得ないと主張する点に現れる。これがマルクス主義の基礎理論と民族的解放という要求の矛盾に由来するとすれば，バウアーの立場もまた当時の社会民主主義者のなかで決して例外ではなかったと言える。カウツキーも，ロシアのユダヤ人問題に関して，ユダヤ人の同化が「ユダヤ人問題の唯一可能な解決策である」と主張している[51]。

---

(44) *Ebd.*, S.419.
(45) *Ebd.*, S.419.
(46) *Ebd.*, S.425.
(47) *Ebd.*, S.429.
(48) *Ebd.*, S.430/431.
(49) この点に関しては，拙稿「マルクス，エンゲルスにおける人間的解放と民族問題——アルノルト・ルーゲとの比較を中心に——」，神田順司編『社会哲学のアクチュアリティ』未知谷 2009 年を参照。
(50) Bauer, Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, *a.a.O.*, S.184.

ユダヤ人の同化というバウアーの結論に対しては批判的な論評も現れた。後にユダヤ社会民主党に参加することになるヤーコプ・ピスティーナーは，チェコ少数派学校をめぐる討論において民族同化が論じられたとき，民族的少数派が多数派から「社会的に際立っている」場合には同化は生じないと述べて[52]，ユダヤ人の同化というバウアーの主張を暗に批判している。しかしバウアーに対して厳しい批判を加えたのは，社会主義シオニズムの理論家たちであった。ダニエル・パスマニクによれば，オーストリアのユダヤ人はブコヴィナとガリツィアに集中しており，しかもユダヤ人労働者は主として手工業者であって，農民と工場労働者はほとんどいない。それ故，バウアーが主張するように，ユダヤ人が「国中に分散」し，「あらゆる生産部門に配分される」という傾向はないという[53]。また，ベルル・ロッカーは，ガリツィアのユダヤ人が農村から都市に流入していることを指摘し，このようなユダヤ人の都市化傾向からすれば，ユダヤ人が分散しそうにないことは明らかであると主張した[54]。またマクシム・アニンは反セム主義がユダヤ人の同化を妨げていると指摘した。彼によれば，ガリツィア・ユダヤ人の窮乏が示しているように，この「社会経済的ゲットーの壁」は「ユダヤの法的＝市民的解放によっては決して破壊され得ない」のであって，それがユダヤ人の同化を不可能としているという[55]。

もちろん，社会主義シオニストによるバウアー批判を額面通りに受け取ることはできない。ガリツィアのユダヤ人人口は19世紀を通して増加していたにもかかわらず，ウィーンなどの都市への移民によって，オーストリア全体のユダヤ人に占めるガリツィア・ユダヤ人の割合は徐々に低下していたからである[56]。またガリツィアにおいても，経済的発展に伴って都市が拡大すると，都市人口に占めるユダヤ人の割合はしだいに減少した[57]。このような傾向はユダヤ人が分散するというバウアーの主張を裏付けていると言えよう。とはいえ，ユダヤ人はなおガリツィアとブコヴィナに集中していた。そうだとすれば，バウアーは少なくとも彼がチェコ人少数派に対して認めた程度の民族的権利をユダヤ人にも承認するべきではなかっただろうか。将来のユダヤ人に同化の見込みがあるからといって，現在のユダヤ人に民族的権利を否定することはできないはずだからである。

---

(51) Kautsky, Das Massaker von Kischeneff und die Judenfrage, in: *Die Neue Zeit*, 21.Jg., Stuttgart 1902/03, Bd.2, S.306.

(52) Jakob Pistiner, Minderheitsschule und Assimilation, in: *Der Kampf*, Bd.3, Wien 1909/10.

(53) D. Pasmanik, Die Sozialdemokratie und die jüdische Nationalität, in: *Jüdische Zeitung*, 2.Jg., Nr.3 vom 17. Jänner, Wien 1908.

(54) Berl Locker, Die allgemeinen Gesetze der Assimilation und die Ostjuden, in: *Der Jude*, 1.Jg., Berlin 1916, S.519/520.

(55) Maxim Anin, Ist die Assimilation der Juden möglich? in: *Sozialistische Monatshefte*［以下 *SM*］, 12.Jg., Bd.2, Berlin 1908, S.618.

(56) Thon, *Die Juden in Oesterreich*, *a.a.O.*, S.9. Vgl. Anton G. Rabinbach, The Migration of Galician Jews to Vienna 1857–1880, *AHY*, Vol.XI, 1975.

(57) Max Rosenfeld, Die jüdische Bevölkerung in den Städten Galiziens 1881–1910, *ZDSJ*, 2.Jg., Nr.2, Berlin 1913, S.24.

当時ユダヤ人が民族的に自立し得たかどうか，今日ではもはや推測するしかない。しかし問題はユダヤ人に対するバウアーの否定的な態度であろう。第一に，バウアーにとってユダヤ人とは自然経済社会において貨幣経済を代表した民族にすぎず，彼はユダヤ人を経済的カテゴリーとしてしか把握していない。マークス・ラートナーは，バウアーが「ユダヤ人問題に関するマルクスの完全に時代遅れとなった理解」を継承したと評している[58]。このような態度と対をなしていたのが，東欧ユダヤ人の文化的再生に対する過小評価であった。これはとりわけユダヤ人学校に関する評価において顕著に現れる。元来，東欧ユダヤ人の下では，ヘデルと呼ばれる学校で男子児童にのみヘブライ語とトーラーが教えられていただけであり，世俗的な教養と女子児童の教育は軽視されてきた[59]。これに対してユダヤ社会民主党は「イディッシュ語を教育言語とする小学校」こそ「民族の文化的発展の基礎」であるとしていた[60]。東欧ユダヤ人の伝統的な教育と比べれば，このような児童の母語による小学校教育がより進歩的な教育方法であったことは明らかであろう。しかしバウアーは，イディッシュ語を教育言語とする学校では「どのような精神が支配するであろうか」と述べて，あからさまに嫌悪感を示したのである[61]。このような発言の背後には，アニンが指摘しているように，イディッシュ語に対する蔑視があったと言えよう[62]。

第二に，政治状況の変化にもかかわらず，バウアーがユダヤ人の同化に固執したということである。ユダヤ社会民主党はユダヤ人労働者の組織化を進め，ガリツィアにおいて無視し得ない政治勢力へと成長する。その結果，1911 年ポーランド社会民主党との和解が成立し，ユダヤ社会民主党はポーランド社会民主党内に残存するユダヤ人部局を吸収した[63]。確かにこれら両党の関係は緊張を孕んでいたとはいえ，このような状況の変化によって，ユダヤ社会民主党を批判すべき政治的動機は失われたはずである。それにもかかわらずバウアーは東欧ユダヤ人の同化を不可避的と看做し続けただけでなく[64]，ユダヤ社会民主党を「ユダヤ分離主義」だと非難しているのである[65]。

---

(58) Markus Ratner, Die nationale Autonomie und das jüdische Proletariat, *SM*, 15.Jg., Bd.3, 1911, S.1340/1341.

(59) Maria Kłańska, *Aus dem Schtetl in die Welt. 1772 bis 1938. Ostjüdische Autobiographien in deutscher Sprache*, Wien / Köln / Weimar 1994, S.165ff.

(60) Kisman, Di yidishe sotsial-demokratishe bavegung in galitsie un bukovine, *a.a.O.*, S.416.

(61) Bauer, Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, *a.a.O.*, S.432..

(62) Anin, Probleme des jüdischen Arbeiterlebens, *SM*, 13.Jg., Bd.1, 1909, S.235.

(63) Kisman, Di yidishe sotsial-demokratishe bavegung in galitsie un bukovine, *a.a.O.*, S.436ff. ロバート・ウィストリッチは，ユダヤ人部局との合併によってユダヤ社会民主党がポーランド社会民主党に「降伏」したと述べているが，このような解釈には首を傾げざるを得ない。実際には，ユダヤ社会民主党は，1913 年，ブコヴィナのユダヤ人活動家も統一し，組織的な拡大を果たしている。Robert S. Wistrich, Austrian Social Democracy and the Problem of Galician Jewry 1890–1914, in: *Leo Baeck Institute Year Book*, XXVI, London / Jerusalen / New York 1981, p.114.

(64) Bauer, Galizische Parteitage, *Werkausgabe*, Bd.8, S.588ff.

(65) Bauer, Die Bedingungen der nationalen Assimilation, *Werkausgabe*, Bd.8, S.622.

ガリツィアの東欧ユダヤ人に対するバウアーのこのような否定的な態度は，東欧ユダヤ人と西欧ユダヤ人の対立から説明されるかもしれない。ウィーンの「ネクタイを締めたユダヤ人［Krawattenjuden］」は，ロシアやガリツィアから流入した「カフタンを着たユダヤ人［Kaftanjuden］」に対してしばしば侮蔑的な態度をとった。というのも西欧ユダヤ人は東欧ユダヤ人に付着した否定的なイメージがユダヤ人一般に拡大することを恐れていたからである。[66] ガリツィア出身の作家ヨーゼフ・ロートは『流浪のユダヤ人』において，ウィーン二区のレオポルトシュタットに流入した東欧ユダヤ人に対するウィーンの西欧ユダヤ人の態度を次のように描いている。「レオポルトシュタットは自発的ゲットーである。［…］プラーターには浮浪者が眠り，駅周辺には最も貧しい労働者が住みついている。［…］誰も彼らの面倒を看る者はいない。一区の新聞編集室に座っている彼らの従兄弟や同宗信徒たちは，彼らと親戚になりたがらず，まして彼らと混同されたくはないのだ。[67]」このような対立図式のなかでバウアーは明らかに西欧ユダヤ人の側にいた。バウアーは繊維工業で成功を収めた裕福な父の下に生まれただけではない。「奇妙な感情を響かせずには，『ドイツ』という言葉すら口にすることはできない。[68]」と述べるほど，ドイツ文化に同化していたバウアーが東欧ユダヤ人に嫌悪感を抱いていたとしても驚くにはあたらない。

しかしバウアーのユダヤ人批判は西欧ユダヤ人にも向けられている。このようなユダヤ人一般に対する批判はしばしば心理学的に解釈されてきた。例えば，ロバート・ウィストリッチによれば，その背景にあるのは，「自分自身の出自に対する無意識的な抑圧」であるという。[69] しかしバウアーがユダヤ教から離脱しなかったこともまた事実である。エルンスト・フィッシャーによれば，それは反セム主義に対する抗議であった。「あなたにはまったく理解できないでしょう」とバウアーは言ったという。「なにしろあなたは『汚らしいユダヤめ』と陰口を叩かれたことがないのだから。[70]」バウアーのこのような発言からは，彼がユダヤ人としてのアイデンティティを強く意識しており，ユダヤ人問題に対するバウアーの批判的立場も苦渋の選択であったことが容易に察せられよう。そうだとすれば，バウアーの態度はむしろ，ジャック・ジェイコブスが試みているように，多くのユダヤ系指導者を擁しつつも，反セム主義への妥協を繰り返したオーストリア社会民主党のアンビヴァレ

---

(66) Haumann, *Geschichte der Ostjuden*, *a.a.O.*, S.115 u. S.163.

(67) Joseph Roth, Juden auf Wanderschaft, in: ders., *Werke*, Bd.2., Frankfurt am Main / Wien 1999, S.857/858.

(68) Bauer, Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, *a.a.O.*, S.69.

(69) Wistrich, *Revolutionary Jews. From Marx to Trotsky*, London 1976, p.117.

(70) Ernst Fischer, *Erinnerungen und Reflexionen*, Hamburg 1969, S.152. エルンスト・ハーニッシュによれば，このバウアーの発言には信憑性があるという。Ernst Hanisch, *Der grosse Illusionist. Otto Bauer* (1881–1938), Wien / Köln / Weimar 2011, S.53. 事実，1930年6月11日，議会において失業保険をめぐる激しい議論がかわされたとき，バウアーはユリウス・ラープによって「汚らしいユダヤ人」と罵倒されている。*Stenographische Protokolle über die Sitzungen des Nationalrates (III. Gesetzgebungsperiode) der Republik Österreich 1929 bis 1930*, III.Band, Wien 1930, S.3837.

ントな態度から説明されるべきであると思われる。[71]

反セム主義［Antisemitismus］とは1873年以降の経済危機を背景として生じたユダヤ人迫害運動である。[72]その核心はユダヤ人解放の撤回という要求であり，その点でキリスト教社会における伝統的なユダヤ人憎悪から区別されるべきであろう。オーストリアにおける代表的な反セム主義者ゲオルク・シェーネラーはドイツ民族派の綱領的文書たる1882年の「リンツ綱領」においてすでに，証券取引への課税を主張し，金融業と対比して「誠実な労働」とされた手工業，農業の支援など，反セム主義の経済的要求を掲げていた。しかし彼はしだいに人種主義へと傾き，1885年には「リンツ綱領」に「ユダヤ条項［Judenpunkt］」を付加し，「あらゆる公的領域におけるユダヤ人の影響の排除」を要求するようになった。[73]

ユダヤ人問題に対するオーストリア社会民主党の政策を基礎づけたアードラーによれば，オーストリアのような反セム主義が強力な国で社会民主党が勢力を拡大するためにはユダヤ人の党と看做されないことが不可欠であった。そこでアードラーが社会民主党のユダヤ人政策として提起したのは，一方で「反セム主義と決して同盟してはならない」が，他方で「ユダヤ人に対して義務を負ってもならない」という中立政策であった。[74]アードラーはこの中立政策を1887年の論考「反セム主義」において次のように基礎づけている。封建制に対するブルジョアジーの勝利はユダヤ人の解放をもたらした。ユダヤ人は数百年にわたって培ってきた商業の才能をもって自由競争のなかに踏み出し，すべての諸民族の商人にとって強力な競争相手として登場する。もちろんユダヤ人が資本主義を作り出したわけではないが，手工業者や農民のような没落しつつある諸階層は自らの運命が世界経済の発展の帰結であることを理解できず，その怒りを身近なユダヤ人に向ける。これが反セム主義である。それ故，アードラーによれば，ユダヤ人問題とは所有階級間の「内輪の争い」であり，労働者がこの闘争に関心を寄せる必要はないという。[75]

この中立政策の延長線上にあるのが反セム主義の「肯定的側面」の承認である。アードラーによれば，反セム主義は資本主義の誤った分析に基づいているが，「誤解は理解への通過点」であり，その限りで反セム主義は「社会民主主義の仕事をこなしている」[76]というのである。バウアーも，1910年の論文「社会主義と反セム主義」において，西ヨーロッパと中央ヨーロッパでは「ユダヤ資本に対

---

(71) Jack Jacobs, *On Socialists and „The Jewish Question“ after Marx*, New York / London 1992, p.86.

(72) オーストリアにおける反セム主義については，Peter Pulzer, *The Rise of Political Anti-Semitism in Germany & Austria*, Revised Edition, Cambridge / Massachusetts 1988, pp.121ff. を参照。

(73) Albert Fuchs, *Geistige Strömungen in Österreich 1867–1918*, Wien 1996, S.177ff.

(74) Victor Adler, Dr. Kronawetter und Schwenderversammlung im Jahre 1880, in: ders., *Aufsätze, Reden und Briefe*, VIII. Heft, Wien 1929, S.338.

(75) Adler, Der Antisemitismus, *Aufsätze, Reden und Briefe*, VIII. Heft, S.346ff.

(76) *Ebd.*, S.348.

する小ブルジョア的闘争」を「資本一般に対するプロレタリア的闘争」と置き換えさえすればよいと述べている。[77] このような発言はアードラーの政策を継承したものと言えよう。[78] 反セム主義に「肯定的側面」を認めることによって，社会民主党は様々な反セム主義的な発言を正当化することになった。それは，社会民主党が「ユダヤ人保護部隊［Judenschutztruppe］」[79] ではないという印象を与え，反セム主義の攻撃をかわすためであった。

しかし，このようなユダヤ人政策は，すべてのユダヤ人に対する反セム主義の攻撃をユダヤ資本に対する攻撃と看做すことによって，ユダヤ人労働者を犠牲にすることになる。エンゲルスがユダヤ人労働者の存在を指摘し，資本主義批判のために反セム主義を持ち出すことはできないと主張したのはそのためであった。[80] しかしエンゲルスの批判にもかかわらず社会民主党は反セム主義の肯定的側面に固執した。それは社会民主党内部にも，反セム主義ではないにせよ，ユダヤ人に対する反感が見られたからである。1907 年から 1908 年にかけてオーストリアに滞在したベルギーの社会主義者ヘンドリク・ド・マンによれば，カール・レンナーやフランツ・シューマイアーなどの非ユダヤ系指導者たちは，アードラーが身近なポストを優先的にユダヤ人で固めていると非難していたという。[81] さらに，アニンが指摘しているように，社会民主党にはアードラーをはじめとするユダヤ人指導部を「ユダヤ支配」[82] と看做す者さえ存在した。その極端な一例が，カール・シャルクのパンフレット「社会民主主義におけるユダヤ人問題」であろう。シャルクは，「巨大な犠牲を払う社会民主党の部隊がアーリア人労働者からなっているのに対して，指導部，独裁者はユダヤ人の非労働者からなっている」と述べ，ユダヤ人社会主義者がユダヤ労働者党として別に組織されるべきであると主張した。さもなければ，「いつか社会民主党においても『ユダヤ人，出て行け！』という呼び声が響き渡るであろう」というのである。[83] バウアーが西ヨーロッパのユダヤ人は民族であることを止めつつあると述べたのは，このような非難を封じ込めるためであったと言えよう。[84]

バウアーがしばしばユダヤ人に否定的な態度をとり，ユダヤ人の民族自治とガリツィア・ユダヤ

---

(77) Bauer, Sozialismus und Antisemitismus, in: *Der Kampf*, Bd.4, Wien 1910/11, S.94.

(78) ウィストリッチは，バウアーがキリスト教社会党を「進歩的」と評価したと述べているが，このような解釈は反セム主義に対するバウアーの譲歩を誇張しすぎている。確かにバウアーは自由主義の転覆をキリスト教社会党の「歴史的業績」に数えているとはいえ，彼はキリスト教社会党の資本主義批判を「後ろ向き」の批判と看做しているからである。Wistrich, *Revolutionary Jews*, *ibid.*, p.121; Bauer, Das Ende des christlichen Sozialismus, *Werkausgabe*, Bd.8, S.519ff.

(79) Bauer, Sozialismus und Antisemitismus, *a.a.O.*, S.94.

(80) Engels, Über den Antisemitismus, *MEW*, Bd.22, S.49ff.

(81) Hendrik de Man, *Gegen den Strom. Memoiren eines europäischen Sozialisten*, Stuttgart 1953, S.91/92.

(82) Anin, Sozialistischer Jude und jüdischer Sozialismus, in: *Die Freistatt*, 1.Jg., Nr.6/7, Berlin 1913, S.348.

(83) Der Judenpunkt in der Sozialdemokratie, in: *Jüdische Zeitung*, 3.Jg., Nr.33 vom 13. August, Wien 1909.

社会民主党の自立化を認めようとしなかった背景に，反セム主義による社会民主党批判，社会民主党におけるユダヤ人嫌悪の傾向という政治状況があったとすれば，バウアーがこのような立場をとることは不可避であったと言えよう。そうだとすれば，バウアーは東欧ユダヤ人の「言語的，文学的，文化的再生に対して完全に無知[85]」であったという批判は，それ自体として誤りではないとしても，問題の本質を突くには至っていないのではないだろうか。問題の核心に迫るためには，東欧ユダヤ人に関してバウアーとは対照的な結論に到達したビルンバウムと比較することによって，彼らに共通する問題を明らかにしなくてはならない。

3. ナータン・ビルンバウムとディアスポラ・ナショナリズム

ビルンバウムは「永遠の修正主義者[86]」と呼ばれるほど，その生涯において繰り返し自らの思想的立場を変更している。10 代の頃に無政府主義に関心を持ったことを度外視するならば[87]，ビルンバウムの思想的変遷の第一期はシオニズム時代であった。彼はレオン・ピンスケルの影響下で『自主解放』誌を刊行し，そこで「シオニズム」という語を初めて使っている[88]。ビルンバウムはバーゼルにおける第 1 回シオニスト会議に参加するものの，ヘルツルが指導する政治的シオニズムと袂を分かち，東欧ユダヤ人のイディッシュ語とイディッシュ文化を擁護し，オーストリアにおけるユダヤ人の民族自治を要求するようになる。これが第二期のディアスポラ・ナショナリズムである。そして第一次世界大戦前に始まる第三期において彼はユダヤ正統派の論客として知られることになる。バウアーと比較されるべきなのは，言うまでもなく，第二期のビルンバウムであるが，その民族理解は初期の思想の批判的発展として把握されるべきであろう。

若きビルンバウムによれば，「どこに住んでいるにせよ，すべてのユダヤ人は共通の血筋，共通の精神的，感情的傾向，共通の記憶と将来の希望によって統一されている[89]」という。しかし周囲の民族の言語を利用し，多様な生活環境のなかにあったユダヤ人を単一の民族と看做すことがどうして

---

(84) Vgl. John Bunzl, Arbeiterbewegung und Antisemitismus in Österreich vor und nach dem ersten Weltkrieg, in: *Zeitgeschichte*, 4.Jg., 5.H., Wien 1976/77, S.165.

(85) Traverso, *The Marxists and the Jewish Question*, *ibid.*, p.78.

(86) Joachim Doron, Jüdischer Nationalismus bei Nathan Birnbaum (1883–1897), in: Walter Grab (Hg.), *Jüdische Integration und Identität in Deutschland und Österreich 1848–1918*, Tel-Aviv 1984, S.229.

(87) Nosn Birnboym [Nathan Birnbaum], An iberblik iber mayn leben, in: *Yubileum-bukh tsum zekhtsiksten geburtstog fun dr. nosn birnboym*, Warsha 1925, S.11.

(88) Jess Olson, *Nathan Birnbaum and Jewish Modernity. Architect of Zionism, Yiddishism, and Orthodoxy*, Standford 2013, p.60.

(89) Anonym [Birnbaum], Panjudaismus, in: *Selbst-Emancipation!* [以下 *SE*], 1.Jg., Nr.6, Wien 1885.

可能だったのか。この点に関してビルンバウムは次のように述べている。他の諸民族がユダヤ人を民族と看做すならば，それがユダヤ人の「民族としての資格」の最良の論拠となるのだと。(90) このような受動的な民族規定は，「敵が我々を民族にする」(91)と述べたヘルツルにも共通するが，このような立場に立つ限り，ユダヤ人は民族として存続するために反セム主義を必要とすることになる。そこでビルンバウムがユダヤ人に自立した存在を保障すべき民族の基礎として注目したのがユダヤ人の文化である。

ビルンバウムは，1892 年の講演「シオニズムの諸原理」においてすでに，ユダヤ人が民族として存在すべき根拠をその「文化的才能」に求めている。(92) もっとも，この時期のビルンバウムにとってユダヤ人の文化を支えていたのはヘブライ語であった。ビルンバウム自身はヘブライ語を話すことも書くこともできなかったが，彼はヘブライ語普及の必要性を主張し，ヘブライ語の習得をユダヤ民族派の義務と看做したのだった。(93) これに対してイディッシュ語を「ゲットーの言語」と特徴づけ，「堕落したヘブライ語」と「堕落したドイツ語」から成るこの「言語のごたまぜ」は文化的民族の言語には相応しくないとした。それが利用され得るとすれば，専ら「闘争手段」としてのみであるという。(94) ビルンバウムのこのような主張は後に文字通り百八十度転回することになる。

1897 年バーゼル・シオニスト会議における演説ではビルンバウムの思想に変化が現れている。彼はユダヤ人に民族という言葉が「厳密に」当てはまるかどうかを疑い，ユダヤ人の民族生活における「変則性」を分析しているのである。それはユダヤ人が「西欧文明のなかに生活する少数部分」と「ユダヤ・ジャルゴンを話し，ユダヤ民族の 4 分の 3 をなす」東欧ユダヤ人に分裂しているということである。(95) ビルンバウムによれば，一方で東欧ユダヤ人は「衣服と言語，文学と芸術，習俗と習慣，宗教的，社会的，法的生活に表現される民族的個性」，すなわち「自らの文化」を持ちながらも，その文化は停滞している。他方で，西欧ユダヤ人はヨーロッパ文明のなかに生きているとはいえ，民族文化を失い，「抽象的なヨーロッパ人としての存在」(96)に陥っているという。それは，ビルンバウムによれば，特定の樹木ではなく「樹木それ自体」(97)であろうとするようなものである。

この時期のビルンバウムはまだ，東西のユダヤ人の文化的対立をシオニズムによって克服しよう

---

(90) Birnbaum, Die nationale Wiedergeburt des jüdischen Volkes in seinem Lande, als Mittel zur Lösung der Judenfrage, in: ders., *Ausgewählte Schriften zur jüdischen Frage* [以下 *AS*], Bd.1, Czernowitz 1910, S.12.

(91) Theodor Herzl, *Der Judenstaat. Versuch einer modernen Lösung der Judenfrage*, Leipzig / Wien 1896, S.26.

(92) Birnbaum, Die Principien des Zionismus, *SE*, 5.Jg., Nr.3, 1892.

(93) B[irnbaum], Hebräische Sprache, *SE*, 5.Jg., Nr.14, 1892.

(94) B[irnbaum], Der jüdische Jargon, *SE*, 3.Jg., Nr.15, 1890.

(95) Birnbaum, Zionismus als Kulturbewegung, *AS*, Bd.1, S.70.

(96) *Ebd.*, S.72.

(97) Birnbaum, Deutsche und polnische Juden, in: *Die Welt*, 1Jg., Nr.16, Wien 1897.

と考えていた。しかし彼は一年あまりでシオニズム運動から離れることになる。その直接的な原因は運動の主導権をめぐるヘルツルとの確執だったが[98]，ユダヤ人の民族的再生に関する理解が二人の間で根本的に異なっていたということが見逃されてはならないであろう。ヘルツルがイディッシュ語を「ゲットーの言語」と呼び[99]，専ら外交によってユダヤ人国家を建設しようと企てたのに対して，ビルンバウムにとってはユダヤ人の文化的再生こそが民族的再生の出発点となるべきだったのである。

そのような対立のなかで東欧ユダヤ人の文化にユダヤ人の民族文化を求めたビルンバウムがまず着手したのは，むしろ西欧ユダヤ人によって蔑まれたイディッシュ語の擁護であった。イディッシュ語はしばしば響きが醜いとされていたが，ビルンバウムは，それを個人の趣味の問題にすぎないと一蹴する[100]。またビルンバウムによれば，イディッシュ語を「ジャルゴン」と呼ぶことも適切ではない。ジャルゴンとは，なんらかの社会階級が民族言語に加えた変更の総体を指すのであって，そのような意味では学生のジャルゴン，船員のジャルゴンというものはある。しかし民族の言語をジャルゴンと呼ぶことはできないというのである[101]。ビルンバウムはヘブライ語が神聖な言語であるのに対して，イディッシュ語は市場の言語にすぎないという批判にも反論している。ヘブライ語をユダヤ人の民族語と看做す者もヘブライ語が市場で話されることを望まないわけにはいかないのではないか[102]と。ビルンバウムはむしろイディッシュ語が日常的に使用されていることに価値を見出し，ユダヤの母たちが祈りを捧げる声の優しさ，イディッシュ語を話す子供たちの声の純粋さに耳を傾けよという[103]。このようにイディッシュ語を東欧ユダヤ人の母語と看做すことによって，ビルンバウムはユダヤ人児童の母語による教育を要求することになる[104]。

さらにビルンバウムは，イディッシュ語が単なるごたまぜ言語にすぎないという批判にも反論する。確かに，イディッシュ語の語彙はドイツ語，ヘブライ語などの多くの源泉から流れ込んだものである。しかし，ビルンバウムによれば，これらの流れはすべて「合流して，力強い統一的な大河[105]」となっているという。このような統一が可能となったのはイディッシュ語に合流した多様な言語がもはや外国語ではなくなっていたからであった。ビルンバウムは，ドイツ語起源の語が「脱ドイツ語化」され，ヘブライ語起源の語もイディッシュ語となっていると指摘し，このようなイディッシュ語の特徴からその民族的価値を引き出している。ビルンバウムによれば，イディッシュ語はユダヤ人の同化が表面的なものにすぎなかったことを示しているのであり，イディッシュ語とは「ドイツ

---

(98) Vgl. Olson, *Nathan Birnbaum and Jewish Modernity*, *ibid.*, pp.70ff.
(99) Herzl, *Der Judenstaat*, *a.a.O.*, S.75.
(100) Birnbaum, Hebräisch und Jüdisch, *AS*, Bd.1, S.302.
(101) Birnbaum, Sprachadel, in: *Die Freistatt*, 1.Jg., Nr.2, Berlin 1913, S.84.
(102) Birnbaum, Für die jüdische Sprache, *AS*, Bd.2, S.38.
(103) Birnbaum, Sprachadel, in: *Die Freistatt*, 1.Jg., Nr.3, Berlin 1913, S.140.
(104) Birnbaum, Ostjüdische Aufgaben, *AS*, Bd.1, S.274.
(105) Birnbaum, Hebräisch und Jüdisch, *AS*, Bd.1, S.302.

化に対するユダヤ人民の魂の抵抗」にほかならないというのである。(106)

東欧ユダヤ人のイディッシュ語がユダヤ民族文化の中核をなし，その言語で創作されるものがユダヤ民族文化であるとすれば，ユダヤ民族文化はもはや単一の政党によって代表され得るものではあり得ない。そこでビルンバウムは「反セム主義以外に前提を持たないシオニズム」は「空疎なショーヴィニズム」しか生み出し得ないと述べて，(107) 政治的シオニズムを厳しく批判すると同時に，単一の政党ではなく，ゲットーの詩人や労働者組織，劇場などによって担われるべき「ユダヤ・ルネサンス運動」を提唱することになる。(108)

政治的シオニズムにユダヤ・ルネサンス運動を対置することによって，ビルンバウムには社会民主主義を再評価する前提が与えられた。もともと彼には反資本主義的傾向があり，ユダヤの邪神は「黄金」であり，その宗教は「粗野な唯物論」であると，若きマルクスを想起させる言葉で自由主義を批判したことさえある。(109) しかしビルンバウムはマルクス主義のインターナショナリズムを受け入れることができず，(110) コロミヤの職工ストライキによって，社会民主党がガリツィア・ユダヤ人の間で影響力を持ち始めると，「社会民主党を遠ざけるために全力を尽さなくてはならない」と述べたのである。(111) しかし，このような社会主義観を変える契機となったのは，ロシアにおけるブンドの活動と，ガリツィア・ユダヤ社会民主党の結成であった。ビルンバウムは今やこれらのユダヤ人社会主義運動に民族的な意義を見出し，ユダヤ社会民主党の結成はユダヤ人の「自立への意志」(112) の表現であると主張するようになる。

こうしてビルンバウムとユダヤ人社会民主主義者の間に共闘が成立することになる。オーストリア社会民主党がユダヤ社会民主党の承認を拒否すると，ビルンバウムは『社会民主主義の継子』という小冊子を出版して，オーストリア社会民主党の同化主義を厳しく批判しただけでなく，「ユダヤ人民の運命」はユダヤ社会民主党にかかっているとさえ主張した。(113) この小冊子はガリツィアで広く読まれたという。(114) ユダヤ社会民主党もビルンバウムの活動に応え，チェルノヴィッツ言語会議の開催を支持している。ユダヤ社会民主党はイディッシュ語の法的承認を要求しており，イディッシュ語の会議がオーストリアで開催されることを歓迎したのである。(115) さらに，1910 年，イディッシュ語の法的承認を求めるデモ行進がチェルノヴィッツで行われたとき，ビルンバウムはブンドの指導者

---

(106) Birnbaum, Die Juden und das Drama, *AS*, Bd.2, S.256.
(107) Birnbaum, Einige Gedanken über den Antisemitismus, *AS*, Bd.1, S.160.
(108) Birnbaum, Die jüdische Renaissance-Bewegung, *AS*, Bd.1, S.167.
(109) Nachum Nathan Agassi [Birnbaum], Wie lange noch? *SE*, 2.Jg., Nr.7, 1886.
(110) B[irnbaum], Die Socialdemokratie und die Juden, *SE*, 3. Jg., Nr.6, 1890.
(111) B[irnbaum], Die Tallisweber von Kolomea, *SE*, 5.Jg., Nr.16/17, 1892.
(112) Birnbaum, Über selbständige jüdische Politik, *AS*, Bd.2, S.134.
(113) Birnbaum, Das Stiefkind der Sozialdemokratie, *AS*, Bd.1, S.300.
(114) Kisman, Di yidishe sotsial-demokratishe bavegung in galitsie un bukovine, *a.a.O.*, S.378.

とともにデモの先頭に立っている。[116]

このようにイディッシュ語を東欧ユダヤ人の民族言語と規定することによって，ビルンバウムは大きな理論的転換を遂げた。しかしそれはビルンバウムがヘブライ語を放棄したということではない。確かに彼は，ヘブライ語を日常語にすることには反対しているが，ビルンバウムによれば，ヘブライ語は「東と西，過去と未来におけるユダヤ人の種族としての統一の表現」[117]であり，ユダヤ民族は二つの言語を持つのだという。このような言語観はチェルノヴィッツ言語会議におけるビルンバウムの立場にも現れている。彼が主催したこの会議においては，イディッシュ語をユダヤ人の民族言語と主張するブンドのエステル・フルムキンらと，ヘブライ語に固執するシオニストが対立したため，妥協案として，イディッシュ語は定冠詞ではなく不定冠詞を付された「ユダヤ人民の民族言語の一つ」[118]と規定されることになった。ビルンバウムは後に，この討論において彼は常にフルムキンと対立したと回想しているが，[119]ビルンバウムがこのような立場をとったのは，この妥協的な規定こそ彼の言語観に沿ったものだったからであろう。

このような言語観にビルンバウムのナショナリズムの特異性を見ることができると思われる。中東欧の諸民族において言語は民族の本質と看做され，民族対立は主として言語対立として現れた。これに対して，もしユダヤ人が二つの言語を持つとすれば，ユダヤ民族は言語によって規定されないということになるであろう。事実，ビルンバウムは言語を民族の本質的基礎とすることは誤りであって，言語を作り出すのは民族精神であると主張している。このように言語を「独自の民族精神の産物」と理解することによって，[120]彼はヘブライ語とイディッシュ語をどちらもユダヤ人の民族言語と看做し，しかも民族はその「被造物」としての言語なしに存続し得ると主張して，西欧ユダヤ人をもユダヤ民族に取り込んだ。[121]しかしビルンバウムの立場がバウアーによって厳しく批判された「民族精神論」であり，不可避的にトートロジーに陥らざるを得ないことは明らかである。というのも，この民族精神なるものは民族的個性の原因ではなく，そこから抽象されたものにすぎないから

---

(115) [Anonym], Erev der yidisher shprakh-konferents, in: Yidisher visnshaftlekher institut (Hg.), *Di ershte yidishe shprakh-konferents. barikhtn, dokumentn un opklangen fun der tsher-novitser konferents 1908*, [以下 *Di shprakh-konferents*], Vilne 1931, S.25.

(116) Kisman, Di yidishe sotsial-demokratishe bavegung in galitsie un bukovine, *a.a.O.*, S.425.

(117) Birnbaum, Hebräisch und Jüdisch, *AS*, Bd.1, S.305.

(118) *Di shprakh-konferents*, S.108.

(119) Birnbaum, Amol un atsind, *Di shprakh-konferents*, S.X.

(120) Anonym [Birnbaum], Nationalität und Sprache, *SE*, 2.Jg., Nr.4, 1886. ジョシュア・フィッシュマンは，ヘブライ語がユダヤ民族精神を生み出したと解釈しているが，これは誤解であろう。Joshua A. Fishman, *Ideology, Society & Language. The Odyssey of Nathan Birnbaum*, Ann Arbor 1987, p.120.

(121) Mathias Acher [Birnbaum], Die nationale Autonomie der Juden, zitiert nach: S.A.Birnbaum, Nathan Birnbaum and National Autonomy, in: Josef Fraenkel (ed.), *The Jews of Austria. Essays on their Life, History and Destruction*, London 1967, S.134/135.

である。[122] それにもかかわらず，ビルンバウムがユダヤ民族精神に固執したのは，彼が言語や文化の違いを超越したユダヤ人の一体性を前提していたからである。

ビルンバウムがこのような立場をとらざるを得なかったのは何故だろうか。それは彼が東欧ユダヤ人とイディッシュ語のためにどれほど尽力したとはいえ，イディッシュ語を流暢に話せず，ジェス・オルソンが指摘しているように，「ドイツ＝ユダヤ文化という世界の一員のままであり続けた」[123] からではないかと思われる。ビルンバウムの長男ゾーロモンは若い時からイディッシュ語の研究に没頭していたが，彼は父親への書簡において，イディッシュ語を話そうとしない父親の態度を咎めている。「ドイツ語を話さなくてはならないということは父上の党にとっては良いことでしょうが，父上の原則にとってはどうでしょうか」と。[124] もちろんビルンバウムもイディッシュ語を学び，イディッシュ語による著作も少なくない。しかしアメリカのイディッシュ語作家モリス・ローゼンフェルドは「イディッシュ語を一言も話せない」ビルンバウムがチェルノヴィッツ言語会議を主催したことに不審の念を抱いていたし，[125] チェルノヴィッツ言語会議で彼が原稿から読み上げたイディッシュ語の開会演説は「ドイツ語風のアクセント」を持ち，「あまり良い印象を与えなかった」という。[126] ガリツィア出身の民俗学者ビンヤミン・ゼーゲルはイディッシュ主義者を厳しく批判し，「ジャルゴンの信奉者や先駆者は，直接的な生存競争から離れ，高価なイデオロギーという贅沢ができる知識人の下にしか見られない」と述べているが，[127] ビルンバウムもまたこのような批判を免れ得ないであろう。しかし彼はまさにそのような東欧ユダヤ人の文化から疎外された知識人であったが故に，ユダヤ民族精神を前提する以外に，自らをユダヤ人の文化共同体に組み入れることができなかったのではないだろうか。

ビルンバウムは言語を民族の本質と看做さなかったが，民族を組織する言語の力は認めていた。そこで彼は，共通の言語を持たないユダヤ人の下では，民族自治が言語に代わって民族を組織すると主張することになる。[128] ここでビルンバウムはバウアーとは正反対の結論に到達する。バウアーがユダヤ人の民族自治を不必要と看做したのに対して，ビルンバウムは，「領土から独立」した民族自治によってユダヤ人が統一されるならば，オーストリアの西欧ユダヤ人もユダヤ民族文化に回帰するかもしれないというのである。[129] しかし，これこそ社会民主党が回避しようとしていた事態であっ

---

(122) Bauer, Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, *a.a.O.*, S.76.
(123) Olson, *Nathan Birnbaum and the Jewish Modernity, ibid.*, p.284.
(124) *Ibid.*, p.181.
(125) Moris Rozenfeld, Di badeytung fun zshargon in galitsien, *Di shprakh-konferents*, S.55.
(126) Gershom Bader, *Yidishe Tageblatt*, 17. September, New York 1908, *Di shprakh-konferents*, S.70.
(127) Binjamin Segel, *Die polnische Judenfrage*, Berlin 1916, S.35/36.
(128) Acher [Birnbaum], Juedische Autonomie, in: *Ost und West*, 6.Jg., H.1, Berlin 1906, Sp.5.
(129) Birnbaum, Die jüdische Nation in Österreich, *AS*, Bd.2, S.149/150.

た。ビルンバウムは，社会民主党もユダヤ人労働者の要求を拒否できないだろうと期待するものの，[130] 彼がこのように主張した翌年にはバウアーの『民族問題と社会民主主義』が発表され，ユダヤ人の民族自治は断固として拒否されることになるのである。

結論

ユダヤ人問題に対するバウアーとビルンバウムの対応は極めて対照的であった。バウアーにとってユダヤ人は主として経済的カテゴリーであったのに対して，ビルンバウムにとってユダヤ人は文化によって規定されていた。バウアーはガリツィア・ユダヤ社会民主党を分離主義であると非難したが，ビルンバウムはそれをユダヤ人の自立への意思の表れと看做した。バウアーはイディッシュ語による学校教育がユダヤ人労働者の利害に反すると主張したが，ビルンバウムはイディッシュ語を東欧ユダヤ人の母語と看做し，母語による児童の教育を求めた。そして，バウアーはユダヤ人が周囲の民族に同化される運命にある以上，ユダヤ人の民族自治は不必要であると主張したのに対して，ビルンバウムによれば，ユダヤ人の民族自治はオーストリアにおける西欧ユダヤ人と東欧ユダヤ人の文化的紐帯を築くべきものであった。

一見すると，バウアーとビルンバウムの間にはまったく共通点がないように見える。その反面で，ユダヤ人問題に対する彼らの態度の対照性を支えていた構造そのものが共有されていたことも明らかである。すなわち西欧ユダヤ人と東欧ユダヤ人が単一の民族をなすという前提である。しかし西欧ユダヤ人と東欧ユダヤ人は文化的に異なっていただけではない。ヨーゼフ・ロートが描いているように，彼らは激しく対立していた。このような対立にもかかわらずユダヤ人を一つの民族と看做したことこそ，バウアーとビルンバウムにおけるユダヤ人問題の理解の根底に潜む矛盾だったのではないだろうか。そうだとすれば，すでに同化した西欧ユダヤ人に東欧ユダヤ人の民族文化を与えようとして，民族精神論に陥ったビルンバウムや，西欧ユダヤ人の経験を一般化し，東欧ユダヤ人の同化を想定したバウアーに見られる理論的な矛盾は，ヨーロッパ・ユダヤ人の現実が，そしてユダヤ人問題そのものが孕む内部矛盾の反映であったと言えよう。

ここで想起すべきことは，ユダヤ社会民主党がユダヤ民族をイディッシュ語によって基礎づけ，同化されたユダヤ人を脱民族化されたものと看做していたということである。それはユダヤ社会民主党が東欧ユダヤ人の下で活動し，それ故，東欧ユダヤ人の現実から出発せざるを得なかったからであった。これに対して，バウアーとビルンバウムの出発点は単一のユダヤ民族であった。これは，根底において，シオニズムと反セム主義にも共有された出来合いの表象にすぎず，彼らはユダヤ人の現実に即した民族理解を示すことができなかったと言えよう。この点にこそ，ユダヤ文化から疎

(130) Acher [Birnbaum], Um die nationale Gleichberechtigung der österreichischen Juden, in: *Die Welt*, 10.Jg., Nr.21, Wien 1906, S.9.

外された西欧ユダヤ人の理論的限界が現れているのではないだろうか。

（東京国際大学非常勤講師）